



豪華なレンガ造りのフランスホテル（右）とエドワード・ロジャースの邸宅（長崎外国語大所蔵）

大浦のフランスホテル

写真に見る

1115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□10□

写真は明治30年代に撮影された大浦33番（現長崎孔子廟横）のオテル・デ・フランス（通称フランスホテル）と、33番甲（現長崎あじさい病院）の日清貿易商社首席代理人エドワード・ロジャースの和風洋館住宅。

写真は明治30年代に撮影された大浦33番（現長崎孔子廟横）のオテル・デ・フランス（通称フランスホテル）と、33番甲（現長崎あじさい病院）の日清貿易商社首席代理人エドワード・ロジャースの和風洋館住宅。多くの欧米観光客が来訪した。これらを相手にナガサキ・ホテルやジャパン・ホテル、クリフ・ホテルといった本格的な西洋式ホテルの開業が相次いだ。

明治36（1903）年、フランス人ジャン・ジュリアン・シロは、3階建てで豪華なレンガ造りのフランスホテルを開業した。ホテルはロシア人とヨーロッパ人を主客とし、長崎で最も洗練していた。リヨン出身のシロは、上海の税関で5年働いた後、明治28（1895）年に長崎を訪れ、フランス海軍に2人の子どもと妻を残して亡くなった。遺体は坂本墓地に眠る。義息アンリも妻オウグスティンを明治38年に26歳で失っている。

洗練されたレンガ造り

（長崎外国語大学長）

随時掲載します